

— 合格への最短ルート —

英検[®] 準1級 完全ロードマップ

合格に必要なすべてを、この1冊に。

語彙・読解・リスニング・英作文・面接対策を徹底解説

効率的な学習法と実践的な戦略で、確実に合格レベルへ



長文読解

読解力を強化し
高得点を取る方法



リスニング

聞き取る力を伸ばし
得点を安定させる



英作文

論理的に書く力を育て
高評価を得るコツ



面接対策

実践的な練習で
自信をつける



学習戦略

効率的な学習計画で
合格へ導く



キング英会話のメソッドを凝縮

多くの受験者を合格へ導いてきた実績に基づく、
信頼の学習メソッドを公開。



キング英会話

KING EIKAIWA

著者

ジェームズ・キング

株式会社キング英会話 代表取締役

第1版
2026年

はじめに

英検準1級は、多くの学習者にとって大きな壁です。

しかし、正しい方法で継続的に学習すれば、決して手の届かない目標ではありません。

本書は、キング英会話で多くの英検受験者を指導してきた経験と、実際の学習データをもとに作成しました。

単なる試験テクニックではなく、長期的に英語力を向上させるための方法を紹介しています。

この本が、皆様の合格そしてその先の英語学習の成功につながることを願っています。

株式会社キング英会話

代表取締役

ジェームズ・キング

目次

はじめに

なぜ私はこの本を書いたのか

英検準1級はどのような試験なのか

この本の使い方

第1章 英検準1級とは何か

英検準1級のレベル

英検2級との違い

合格すると広がる可能性

大学入試での活用

就職活動での活用

海外留学への第一歩

第2章 合格までのロードマップ

合格までに必要な学習時間

効率的な学習計画の立て方

1年間で合格を目指す場合

6か月で合格を目指す場合

3か月で合格を目指す場合

モチベーションを維持する方法

第3章 語彙力強化戦略

なぜ語彙力が最重要なのか

目標語彙数

効果的な単語の覚え方

忘れにくい復習法

語源を活用した学習法
おすすめ単語帳
毎日の学習ルーティン

第4章 長文読解攻略法
長文問題の特徴
速読力を身につける
スキミングとスキヤニング
設問先読みテクニック
頻出テーマの分析
正答率を高める方法

第5章 リスニング攻略法
準1級リスニングの特徴
聞き取れない理由
先読みの技術
メモの取り方
おすすめ教材
毎日続けるリスニング習慣

第6章 英作文攻略法
英作文の採点基準
高得点答案の特徴
使いやすい構成テンプレート
序論の書き方
本論の書き方
結論の書き方
高評価を得る表現集
頻出テーマ対策

よくあるミス

第7章 要約問題攻略法

要約問題とは何か

重要情報を見抜く方法

段落構成の考え方

自分の意見を書かない理由

練習方法

頻出ミス

第8章 二次試験面接対策

面接試験の流れ

アティチュードとは何か

ナレーション対策

Q&A 対策

面接官が見ているポイント

高評価を得るコツ

模擬面接の重要性

第9章 不合格になる人の共通点

勉強時間不足

単語学習の軽視

復習不足

英作文練習不足

焦りすぎる学習

諦めてしまう人の特徴

第10章 合格者の共通点

毎日学習する

完璧を求めすぎない
読書習慣がある
アウトプットを重視する
長期的視点を持つ

第 11 章 保護者にできるサポート
子どものやる気を引き出す方法
声かけのポイント
避けるべき言葉
家庭学習環境の整え方
長期的な視点の重要性

第 12 章 英検準 1 級合格後の世界
1 級への挑戦
TOEIC への応用
留学という選択肢
英語を仕事に活かす
生涯学習としての英語

付録
準 1 級おすすめ教材一覧
おすすめ学習スケジュール
英作文テンプレート集
頻出テーマ一覧
面接頻出質問集
学習記録シート

第1節 英検準1級は本当に難しい試験なのか

英検準1級について話をすると、多くの人が最初に口にする言葉があります。「準1級は難しいですね。」これは英語学習者の間では半ば常識のように語られていますし、実際に英検2級までは順調に合格してきた人が準1級で初めて大きな壁にぶつかることも珍しくありません。そのため、まだ勉強を始める前から不安を感じている人も少なくないでしょう。しかし私は、長年にわたって受験者を指導してきた経験から、この「準1級は難しい」という言葉について少し違う見方をしています。確かに簡単な試験ではありません。しかし多くの人が思っているほど特別な試験でもないのです。

私がそう考える理由は単純です。これまで実際に合格した人たちを数多く見てきたからです。帰国子女もいました。留学経験者もいました。しかしそれ以上に多かったのは、ごく普通の日本の学生たちでした。特別な環境があったわけではありません。特別な才能があったわけでもありません。小学校から日本の学校へ通い、日本の教育の中で育ち、日本にしながら勉強を続けて合格した人たちです。中には部活動で忙しい高校生もいましたし、仕事をしながら夜に勉強を続けた社会人もいました。そのような人たちを実際に見ていると、準1級を「選ばれた人だけが到達できる資格」と考えることはできません。むしろ、適切な学習を継続した人が到達できる現実的な目標と考えるほうが正確なのです。

では、なぜ多くの人が準1級を必要以上に恐れるのでしょうか。その理由の1つは、受験者が試験そのものではなく、自分の現在地を見ているからだだと思います。例えば山の頂上を見上げたとき、多くの人はその高さに圧倒されます。しかし頂上だけを見えていても山は登れません。実際に登山を

する人は、まず目の前の1歩を進みます。その次の1歩を進みます。そして気が付けばかなり高い場所まで来ています。英検準1級も同じです。まだ十分な語彙力がない段階で過去問を見ると絶望的に感じるかもしれません。しかし、それは今の自分から見た景色にすぎません。必要な単語を覚え、読書量を増やし、英作文の練習を行い、英語に触れる時間を積み重ねていけば、数か月後にはまったく違う景色が見えるようになるのです。

私は指導の現場で、「自分には無理だと思います」という言葉を何度も聞いてきました。そして興味深いことに、その言葉を言った人の中には後に合格した人も少なくありません。つまり、学習者自身の予想はそれほど当てにならないのです。人は現在の実力を基準に未来を判断します。しかし英語学習とは、未来の自分を変える作業です。今できないことが半年後にもできないとは限りませんし、今分からないことが1年後にも分からないとは限りません。実際、私が見てきた合格者の多くは、最初から自信に満ちあふれていたわけではありません。不安もありましたし、苦手意識もありました。それでも学習を続けた結果、最終的に合格へたどり着いたのです。

準1級を難しく感じさせるもう1つの理由は、英検2級までの勉強法がそのままでは通用しなくなることです。2級までは比較的短期間の暗記でも成果が出る場合があります。しかし準1級では英語との付き合い方そのものを変える必要があります。単語を覚えるだけでなく、読む量を増やし、考える力を養い、自分の意見を英語で表現できるようにならなければなりません。この変化に気付かないまま従来の勉強法を続けてしまう人は苦勞します。しかし逆に言えば、求められているものを理解し、それに合わせて学習方法を変えた人は着実に前進できるのです。

英検準1級に合格する人たちを見てみると、彼らにはある共通点があります。それは特別な才能ではありません。毎日少しずつでも英語に触れ続け

ることです。単語を覚える。文章を読む。音声を聞く。英作文を書く。復習をする。その繰り返しです。非常に地味ですし、話題になるような勉強法ではありません。しかし結局のところ、そのような地道な積み重ねが最も大きな成果を生みます。私はこれまで数多くの合格者を見てきましたが、最後に結果を出した人たちは例外なく継続する力を持っていました。

だから私は、準1級について尋ねられたとき、「難しい試験ですか」という質問に対して少し変わった答え方をします。「簡単ではありません。しかし多くの人が思っているほど特別な試験でもありません」と答えるのです。なぜなら、本当に必要なのは天才的な才能ではなく、正しい方向への継続だからです。そして継続は、才能と違って誰にでも選ぶことができます。準1級への道は決して平坦ではありません。しかし一歩ずつ進み続ける人にとっては、十分に到達可能な目標なのです。

本章では、このあと多くの受験者がどこでつまずき、なぜ努力しているにもかかわらず結果が出なくなるのかについて見ていきます。実は多くの不合格者は能力不足で失敗しているのではありません。ほんの少しだけ方向を間違えているのです。そして、その方向の違いこそが合格と不合格を分けているのです。

Section 2

さらに興味深いことがあります。成績が伸びない受験者の多くは、自分が伸びていない理由を正しく理解していません。これは決して頭が悪いという意味ではありません。むしろ真面目な人ほど、その罣にはまりやすいのです。例えば、長文問題の正答率が低い学生がいたとします。その学生は読解力が足りないと思い込み、長文問題ばかり解くようになります。しかし実際には、問題の根本原因は語彙力不足かもしれません。知らない単語が多すぎるために文章の内容を十分理解できていないだけなのです。この

ような場合、本当に必要なのは長文問題を増やすことではありません。語彙力を強化することです。しかし本人はその事実に気付かないまま、さらに多くの長文問題を解き続けます。そして再び同じような点数を取り、「自分には読解力がない」と結論づけてしまうのです。

私は英語学習を庭づくりに例えることがあります。美しい庭を作ろうと考えたとき、多くの人は花そのものに目を向けます。しかし実際には、花の前に土があります。土の状態が悪ければ、どれほど立派な苗を植えても思うようには育ちません。英語学習もそれとよく似ています。多くの受験者は点数という花を見えています。しかし、その根底にある土の状態を確認しようとしません。語彙力は十分なのか。読書習慣はあるのか。英文を大量に読む経験を積んでいるのか。こうした土台の部分を無視したまま結果だけを求めても、思うような成果は得られません。

英検準1級を目指す段階になると、勉強時間そのものよりも学習の密度が重要になります。もちろん勉強時間は必要です。しかし、ただ机に向かっていればよいというものではありません。実際、私は何人もの受験者を見てきましたが、毎日三時間勉強している人が必ずしも成果を出しているわけではありませんでした。一方で、一時間しか勉強できなくても大きく成長する人もいました。その差は何でしょうか。それは、英語の知識を実際の英語力へ変換できているかどうかなのです。

例えば、単語帳を見ながら日本語訳を答えられるだけでは十分とは言えません。その単語を英文の中で見たときに理解できるかどうか、さらに自分で使えるかどうか重要です。ところが多くの受験者は、日本語訳を覚えた段階で満足してしまいます。本当の学習はそこから始まるにもかかわらずです。同じことはリスニングにも当てはまります。音声を聞くだけで満足してしまう人もいます。しかし聞き取れなかった部分を確認し、なぜ聞き取れなかったのかを分析しなければ成長にはつながりません。

私はしばしば受験者にこう質問します。「その勉強によって何ができるようになりましたか。」すると意外なほど多くの人が答えに詰まります。勉強はした。しかし何ができるようになったのかは説明できない。これは非常に危険な状態です。なぜなら、勉強することそのものが目的になっているからです。本来の目的は英語力を高めることであり、合格へ近づくことです。勉強したという事実だけでは結果は保証されません。

また、成績が伸びない人ほど新しい教材を探し続ける傾向があります。ある単語帳を買ったかと思えば、数週間後には別の単語帳へ乗り換えます。問題集も次々と買います。動画も見ます。アプリも試します。そのたびに期待を抱きますが、やがて同じように飽きてしまいます。もちろん教材選びは大切です。しかし、私が見てきた合格者たちは驚くほどシンプルでした。教材の数は多くありません。むしろ少数の教材を徹底的に使い込んでいました。何冊も買うよりも、一冊を繰り返し学ぶことのほうがはるかに大きな効果を生むことを理解していたのです。

私は英検準1級の学習において、才能という言葉が使われる場面を見るたびに違和感を覚えます。もちろん世の中には覚えるのが速い人もいます。読書が得意な人もいます。しかし、本当に重要なのは才能ではありません。もし才能だけで決まるのであれば、努力しても意味がないことになってしまいます。しかし現実とは違います。私は何度も、最初は最も苦労していた受験者が最後に合格する場面を見てきました。そのような人たちは天才ではありませんでした。ただし、自分の弱点から逃げませんでした。面倒な復習を続けました。苦手な読解に取り組みました。必要な語彙を覚え続けました。そして気が付けば、以前は手の届かないと思っていたレベルに到達していたのです。

実際に、私が指導したある高校生もそんな生徒の1人でした。最初の頃は

模試の結果が振るわず、本人も保護者も自信を失いかけていました。しかし話を聞いてみると、長文問題ばかり解いている一方で語彙学習が十分ではありませんでした。そこで学習法を見直し、問題演習の量を減らして語彙強化と多読を中心にした学習へ切り替えました。当初は遠回りに見えたかもしれませんが。しかし数か月後には長文の理解度が明らかに向上し、以前は時間切れになっていた問題も最後まで解けるようになりました。そして最終的には準1級に合格しました。私がこの生徒から学んだのは、努力の量よりも努力の方向の方が重要だということです。もっと頑張ることではなく、何を頑張るべきかを理解した瞬間から結果は変わり始めたのです。

だからこそ、もし今の皆さんが「こんなに勉強しているのに伸びない」と感じているのであれば、落ち込む必要はありません。まず確認すべきなのは、自分の努力が正しい方向を向いているかどうかです。英検準1級に必要なのは根性だけではありません。努力だけでもありません。正しい方向へ向かった努力です。方向さえ合っていれば、進む速度が遅くても必ず前へ進めます。しかし方向が間違っていれば、どれほど頑張っても目的地には近づけません。だからこそ、次の節では多くの受験者が見落としている重要な問題について考えてみたいと思います。なぜ英検2級までの勉強法が、準1級になると思うように通用しなくなるのでしょうか。

第3節 英検2級の勉強法が通用しなくなる理由

英検準1級を目指す人の多くが戸惑うのは、自分なりに努力しているにもかかわらず、以前ほど成績が伸びなくなることです。英検3級や準2級、あるいは2級までは順調に合格してきた人ほど、この壁に強くぶつかります。今までと同じように勉強しているはずなのに結果が出ない。以前は覚えた単語がそのまま点数につながっていたのに、準1級ではまるで終わりが見えない。そのため、「自分には準1級の才能がないのではないか」と

考えてしまう人もいます。しかし実際には、才能の問題ではないことがほとんどです。本当の問題は、2級までの勉強法をそのまま持ち込んでいることにあります。

私はこれまで数多くの受験者を見てきましたが、2級と準1級の間には単なるレベルの差以上のものが存在すると感じています。2級までは学校英語の延長線上にあります。もちろん努力は必要ですが、学校の授業をしっかり受け、教科書の内容を理解し、試験対策を行えば十分に合格が狙えるレベルです。そのため、多くの受験者は「英語の勉強とは何か」を深く考えなくても成果を出せてしまいます。しかし準1級になると話が変わります。ここからは英語そのものと向き合わなければならなくなるのです。

例えば、2級までは単語帳の単語をある程度覚えれば試験で対応できる場面が少なくありません。しかし準1級になると、覚えなければならない語彙の量が大幅に増えるだけでなく、その単語が実際に文章の中でどのように使われるのかまで理解する必要があります。日本語訳だけを暗記していても十分ではありません。長文の中で見たときに意味が分かり、リスニングで聞いたときに理解でき、英作文で必要になったときに使えるレベルまで身につけなければならぬのです。この差は想像以上に大きく、多くの受験者が最初に戸惑う原因になります。

さらに、準1級では読む量そのものが圧倒的に不足している人が目立ち始めます。私はこれまで、多くの学生に「最近英語で何を読みましたか」と質問してきました。しかし返ってくる答えの多くは、「問題集です」というものでした。もちろん問題集も大切です。しかし、それだけでは足りません。英語力を本当に伸ばしている人は、問題集以外の英語にも触れています。記事を読み、本を読み、興味のある分野について調べています。学校の教科書だけで国語力が完成しないのと同じように、問題集だけで高度な読解力が身につくことはないのです。

私はときどき、学習者に少し意地悪な質問をすることがあります。「この1年間で日本語の本を何冊読みましたか。」すると、人によってはほとんど読んでいないことがあります。そして、そのような人ほど英語の長文を苦手としていることが多いのです。これは決して偶然ではありません。読解力とは単に英語の知識だけではないからです。文章の流れを理解する力、筆者の意図を読み取る力、論理関係を把握する力は、日本語でも英語でも共通する部分があります。普段から文章を読む習慣がない人が、突然高度な英文だけ読めるようになることはありません。

また、多くの受験者は「英語を勉強すること」と「英語に触れること」を混同しています。勉強とは、問題を解いたり単語を覚えたりすることです。一方で英語に触れるというのは、興味のある記事を読んだり、海外の動画を見たり、英語の本を楽しんだりすることです。準1級以上になると、この後者の比重が大きくなります。ところが2級まで順調に進んできた人の中には、勉強だけで何とかしようとする人が少なくありません。その結果、英語が知識の集合体のままになってしまい、生きた言語として身につかないのです。

もう1つ、大きな違いがあります。それは自分の考えを持つことです。英検2級までは知識が中心でした。しかし準1級では、英作文や面接で自分の意見を述べる必要があります。環境問題についてどう思うのか。教育についてどう考えるのか。テクノロジーは社会にどのような影響を与えるのか。このような問いに対して、自分の意見を論理的に説明しなければなりません。ここで苦勞する受験者は非常に多くいます。しかし実際には、英語以前の問題であることも少なくありません。日本語でも自分の考えを整理する習慣がないため、英語で表現しようとしても言葉が出てこないのです。

私は準1級を目指す受験者に対して、「英語の勉強をする人から、英語を使う人へ変わらしましょう」とよく話します。これは単なる言葉遊びではありません。2級までは勉強の延長線で突破できる部分があります。しかし準1級から先は、英語を実際に使いながら成長していく必要があります。読む。聞く。考える。書く。話す。そのすべてを日常の中に少しずつ取り入れていく必要があるのです。

だからこそ、準1級で伸び悩んでいる人は、自分を責める必要はありません。むしろ「今までの方法では足りなくなったのだな」と考えるほうが建設的です。英検2級の成功体験は素晴らしいものです。しかし、その成功体験が準1級では足かせになることもあります。以前うまくいった方法を手放し、新しいステージに合わせた学習法へ変化できるかどうか。それこそが、多くの受験者にとって最初の大きな分岐点なのです。

実際、準1級に合格した人たちを振り返ってみると、その多くがどこかの時点で学習方法を変えています。単語帳を眺めるだけだった人が英語の記事を読み始めたり、問題集中心だった人が読書習慣を身につけたりしています。変化の形は人それぞれですが、共通しているのは英語との関わり方を深めていることです。準1級は英語学習のゴールではありません。むしろ、本当の意味で英語を使い始める入口なのです。そして、その入口に立ったとき、多くの受験者は初めて気付くことになります。自分がこれまで学んできたのは英語の知識であり、これから身につけるべきものは英語力そのものののだと。

第4節 日本人が幼い頃から身につける英語の悪習慣

英検準1級の学習について考えるとき、多くの人は高校生や大学生になってからの勉強法を気にします。しかし私は、そのずっと前に問題が始まっていることが少なくないと感じています。実際、英語力の伸び悩みは中学

生や高校生になって突然発生するものではありません。幼い頃から積み重ねられてきた習慣や考え方が、何年も後になって大きな影響を与えている場合があるのです。

もちろん、これは誰かを責めるための話ではありません。保護者も学校の先生も、子どもたちのために思って行動しています。しかし善意と効果は必ずしも同じではありません。英語教育の世界では、良かれと思って行われていることが、結果的に将来の学習を難しくしている場面を私は数多く見てきました。

例えば、幼い子どもにアルファベットを教える場面を想像してみてください。多くの場合、大人は「エー、ビー、シー」と教えます。それ自体は特に問題には見えません。しかし、その後でさらに「シー」「ブイ」「アール」「エル」といった日本語化された名称が強く定着してしまうことがあります。すると子どもの頭の中では、英語の文字と日本語の音が結び付いてしまいます。本来であれば英語の音として認識すべきものが、日本語の知識として保存されてしまうのです。

ある保護者の方は、お子さんのために一生懸命アルファベットを教えていました。その熱意は本当に素晴らしいものでした。しかし後になって発音指導を行うと、そのお子さんはCやVやRを英語の音ではなく、日本語の音として完全に定着させていました。当然ですが、それは保護者の責任ではありません。その保護者も同じように教わってきたからです。しかし英語学習では、最初に覚えたものほど長く残ります。善意で行われた指導が、後になって大きな修正作業を必要とすることがあるのです。

この影響は意外なほど長く続きます。

以前、ある保護者の方とお話したことがあります。その方は、お子さん

の英語学習を熱心にサポートしていました。アルファベットも一緒に練習し、自宅でも英語に触れる時間を作っていました。しかし詳しくお話を伺うと、Cは「シー」、Vは「ブイ」、Rは「アール」と教えていたのです。もちろん、その保護者の方が悪いわけではありません。その方自身も同じように教わって育ったからです。しかし英語学習では、最初に覚えた知識ほど強く定着します。そのお子さんも後になって英語らしい発音を身につけようとしたとき、無意識のうちに日本語の音へ引き戻される場面が何度もありました。保護者の善意が、ときとして将来の修正作業を増やしてしまうことがあるのです。

私は大人になってから英語を学び直している方々とも接してきましたが、その中には何十年も前に覚えた音の癖を修正しようと苦勞している人がいます。これは決してその人の責任ではありません。最初に与えられた情報を信じて学習してきただけだからです。しかし英語学習というのは、不思議なことに最初の習慣ほど強く残ります。後から新しい知識を学ぶよりも、古い習慣を修正する方が難しいことも少なくありません。

また、多くの子どもたちは英語を教科として学び始めます。英語そのものをコミュニケーションの道具として見る前に、テストの科目として認識してしまうのです。その結果、「間違えてはいけない」「完璧に答えなければならない」という意識が強くなります。しかし本来、言語とは間違えながら使うことで身についていくものです。赤ちゃんが日本語を学ぶとき、最初から完璧な文法で話せるわけではありません。それでも周囲とのコミュニケーションを通じて少しずつ言葉を身につけていきます。ところが英語になると、多くの人が急に失敗を恐れるようになります。

この傾向は学年が上がるにつれてさらに強くなります。中学生の頃には積極的に発音していた生徒が、高校生になると急に恥ずかしがることがあります。

ます。周囲から目立ちたくないという気持ちが生まれるからです。特に日本では、クラスの中で周囲と違う行動を取ることに抵抗を感じる生徒が少なくありません。そのため、正しく発音するよりも周囲に合わせることを優先してしまうケースがあります。

私はこれを非常にもったいないことだと感じています。

実際に、私が指導した生徒の中にもそのようなケースがありました。その生徒は小さい頃から英語を学んでいたため発音が比較的自然而しかったです。しかし学校では周囲との違いを意識するようになり、徐々に発音を崩すようになってしまいました。英語らしく発音すると目立つからです。ところが面白いことに、その後本格的に英検上位級を目指し始めると、今度は元の発音へ戻す努力を始めました。つまり本人は最初から正しい方向へ進んでいたにもかかわらず、一度遠回りをしてしまったのです。

英語は知識ではなく技能です。ピアノや水泳と同じです。正しいフォームで練習した方が上達は早くなります。しかし英語の場合、しばしば逆のことが起こります。本来なら正しい英語の音に近付こうとするべきなのに、周囲と同じ発音に戻されてしまうことがあるのです。その結果、本来伸ばせる能力が十分に伸びなくなってしまいます。

さらに、多くの家庭では英語に触れる時間そのものが極端に少ないという現実があります。これは保護者が悪いという話ではありません。日本で生活している以上、家庭内で英語を使う機会が少ないのは当然です。しかし、その結果として英語は週に数回だけ学ぶ特別なものになってしまいます。週に一度英会話スクールへ行き、学校の授業で少し勉強し、それ以外は英語に触れない。そのような状態では英語が生活の一部になることは難しいでしょう。

私は、英語力の高い生徒たちに共通していることを長年観察してきました。彼らは必ずしも勉強熱心というわけではありません。しかし英語との接触時間が圧倒的に長いのです。本を読む。動画を見る。歌を聞く。記事を読む。ゲームをする。形はさまざまですが、英語が生活の中に存在しています。勉強しているという感覚さえなく、自然に英語へ触れていることも少なくありません。

一方で、英語を教科としてしか捉えていない人は、教科書を閉じた瞬間に英語との関係も終わってしまいます。そして数年後、「なぜ英語が伸びないのだろう」と悩むことになります。当然と言えば当然です。言語は触れた量に比例して成長するからです。

だからこそ、英検準1級を目指す人は過去の習慣を一度見直す必要があります。これまでのやり方で結果が出ていないのであれば、新しい考え方を取り入れる必要があります。英語をテスト科目としてだけ見るのではなく、実際に使う言語として考えること。間違いを恐れるのではなく、失敗を成長の一部として受け入れること。そして週に数回の勉強ではなく、毎日少しずつでも英語と関わること。それが本当の意味での英語力につながっていくのです。

英検準1級で苦戦している受験者の多くは、自分でも気付かないうちに長年の習慣の影響を受けています。しかし逆に言えば、その習慣を変えることができれば、大きく成長する可能性もあるのです。そして、その最も象徴的な問題が次にお話しするカタカナ英語なのです。

第5節 カタカナ英語という見えない壁

日本人の英語学習について語るとき、避けて通れない問題があります。それがカタカナ英語です。この話題になると、「発音なんて通じればいいじ

ゃないですか」と言う人もいますし、「そこまで細かいことを気にする必要がありますか」と聞かれることもあります。確かに、世界にはさまざまな訛りがありますし、完璧な発音だけが英語ではありません。しかし私が問題にしているのは発音の美しさではありません。英語を正しく理解し、正しく身につけるための土台の話です。

例えば、多くの日本人は英語を耳よりも文字から学び始めます。その結果、本来は音として覚えるべきものをカタカナへ変換して記憶する癖が身についてしまいます。すると英語を見るたびに、一度頭の中で日本語へ変換する作業が始まります。英語を英語のまま理解するのではなく、日本語を経由して理解しようとするのです。この習慣は初級レベルでは大きな問題にならないかもしれませんが、しかし、準1級のような高度なレベルになると確実に足を引っ張ります。

私はこれまで数多くの生徒の発音を見てきましたが、興味深いことがあります。それは、発音の問題を抱えている生徒ほどリスニングにも苦勞する傾向があることです。以前、ある中学生の生徒がいました。その生徒は筆記試験では高得点を取れるのですが、リスニングになると急に点数が下がっていました。最初は耳の問題だと思われていました。しかし実際に発音を確認してみると、LとR、VとB、THの区別が曖昧だったのです。そこで発音練習と音読を集中的に行いました。すると不思議なことに、発音だけでなくリスニングの点数まで向上しました。これは特別なケースではありません。英語の音を正しく認識できるようになると、聞き取れる音も増えるからです。

これは偶然ではありません。自分で正しく発音できない音は、聞き取ることも難しいからです。例えばLとRの違いです。あるいはVとBの違いです。さらにTHの音もそうです。日本語には存在しない音であるため、意識的に学ばなければ区別できるようにはなりません。そして区別できな

ければ、聞き取りにも影響します。

ここで誤解していただきたいくないのは、「ネイティブのように話さなければならぬ」と言っているわけではないということです。私はそのような考え方には賛成しません。しかし、英語には英語の音があるという事実は無視できません。野球を学ぶのであれば正しい投球フォームを知る必要がありますし、ピアノを学ぶのであれば正しい指使いを学ぶ必要があります。英語も同じです。完璧である必要はありませんが、正しい方向は知っておくべきです。

残念ながら、日本では時として奇妙なことが起こります。実際に私が指導した生徒の中には、正しい発音を意識して話したところ、「そんな発音では周りの生徒が分からないから、もっとカタカナみたいに言いなさい」と指導された経験を持つ人もいました。もちろん、その先生に悪意があったわけではないでしょう。その場の授業運営を考えた結果だったのかもしれませんが。しかし私は、その話を聞かされたときに非常にもったいないと感じます。

考えてみてください。もしピアノの先生が「正しい弾き方をすると他の生徒が真似できないから、少し間違った弾き方にしましょう」と言ったらどう感じるでしょうか。あるいは水泳の先生が「正しいフォームだと周りから浮いてしまうので、もっと崩したフォームで泳ぎましょう」と言ったらどうでしょうか。おそらく多くの人が違和感を覚えるはずです。しかし英語教育の世界では、似たようなことが起こることがあります。

さらに厄介なのは、カタカナ英語が本人にとって自然に聞こえてしまうことです。長年その音に慣れてきたため、英語本来の音のほうがかえって違和感を覚えるのです。そのため、正しい発音を学ぶ最初の段階では多くの人が戸惑います。「なぜそんな発音になるのですか」「本当にその音で合って

いますか」と質問されることもあります。しかし、そこで学習をやめてしまう人と続ける人の間には、その後大きな差が生まれます。

実際、英語力の高い学習者ほど音を大切にしています。必ずしも発音が完璧というわけではありません。しかし英語は英語の音で覚えるという姿勢を持っています。新しい単語を覚えるときも、スペルだけではなく発音も確認します。音声を聞きながら覚えます。リスニング練習をするときも、単に聞き流すだけではなく、自分でも声に出して確認します。こうした習慣が積み重なることで、読む力だけでなく聞く力や話す力も伸びていくのです。

私は準1級を目指す生徒に対して、発音を軽視しないように伝えていきます。しかしそれは発音テストで高得点を取るためではありません。語彙力を本物にするためです。リスニングを強くするためです。そして英語を英語のまま理解できるようになるためです。準1級レベルになると、単語を日本語の意味だけで覚える学習法には限界があります。音、意味、使い方を結び付けながら覚えることによって、初めて実践的な語彙力が身につけていきます。

英語学習において、カタカナ英語は目に見えない壁です。多くの人はその存在に気付いていません。しかし、気付かないまま学習を続けると、読解にもリスニングにもスピーキングにも少しずつ影響を与えます。反対に、その壁の存在を理解し、少しずつ乗り越えていくことができれば、英語力は大きく変わります。準1級は単なる知識の試験ではありません。実際に英語を使う力が求められる試験です。その入口に立つためにも、私たちは英語を英語として学ぶ姿勢を身につける必要があるのです。

第6節 読まない人が伸びない理由

私はこれまで長年にわたって英語を教えてきましたが、「英語が得意な人にはどんな共通点がありますか」と聞かれたら、おそらく真っ先に読書習慣を挙げるでしょう。これは英語の本に限りません。日本語でも英語でも構いません。とにかく文章を読む人は強いのです。そして反対に、読まない人はどこかの段階で必ず伸び悩みます。

この話をする、「私は単語を勉強しています」「問題集は解いています」と答える人がいます。もちろんそれらも大切です。しかし、単語帳と読書はまったく別のものです。単語帳では単語を個別に学びますが、本物の英語は文章の中に存在しています。どのような場面で使われるのか。どの単語と一緒に使われるのか。どのようなニュアンスを持っているのか。そうしたことは文章を大量に読むことによって初めて身についていくのです。

私は時々、生徒にこう質問します。

「この1年間で英語の本を何冊読みましたか。」

すると、多くの場合、教室に沈黙が流れます。

もちろん、英検準1級を目指しているのですから勉強はしています。しかし問題集を読むことと、本を読むことは違います。長文問題を解くことと、継続的に文章を読むことも違います。ところが多くの受験者は、その違いに気付いていません。

考えてみてください。日本語の読解力はどのように身についたのでしょうか。学校の国語の問題集だけで身についたわけではないはずです。小説を読み、漫画を読み、新聞を読み、インターネットの記事を読み、何年もかけて大量の文章に触れてきた結果として現在の読解力があります。英語も本来は同じはずです。しかし多くの人は、英語だけは問題集によって習得

できると考えてしまいます。

その結果が、準1級で現れるのです。

準1級の長文問題を見て、「難しい」と感じる人は少なくありません。しかし実際には、問題そのものが難しいというよりも、長い英文を読む経験が不足していることが原因である場合が少なくありません。普段から数百語、数千語の英語を読んでいる人にとってはそれほど特別な文章ではなくても、問題集の英文しか読んだことがない人にとっては非常に長く感じられます。

英語教育の世界には、「多読」と呼ばれる考え方があります。簡単に言えば、大量に読むことによって英語力を向上させる方法です。私はこれまで数多くの学習法を見てきましたが、多読ほど効果を実感しやすいものはないと感じています。なぜなら、多読は複数の能力を同時に鍛えるからです。語彙力が増えます。読解力が向上します。文法パターンにも慣れます。自然な表現も身につきます。さらに、英作文を書く際の表現の引き出しも増えます。

ところが、多読には大きな欠点があります。

面白くないことがあるのです。

少なくとも最初はそうです。

知らない単語ばかり出てきます。読むのに時間がかかります。内容も十分に理解できません。達成感もそれほどありません。そのため、多くの受験者は途中でやめてしまいます。そして再び問題集中心の学習に戻ってしまうのです。

しかし私は、まさにその時期を乗り越えた人に大きな成長が訪れるのを何度も見てきました。

最初は1ページ読むのに20分かかっていた人がいます。辞書を引かないと前へ進めませんでした。しかし数か月後には同じレベルの文章を驚くほど速く読めるようになっていました。本人は特別な勉強法を使ったわけではありません。ただ読み続けただけです。ところが、その積み重ねが語彙力を増やし、読解力を向上させ、結果として英検の点数まで引き上げたのです。

私が特に心配しているのは、「読書が嫌いだから仕方がない」と考えている人です。確かに読書が好きな人は有利です。しかし好きでなければ伸びないというわけではありません。重要なのは、読む内容を工夫することです。

英語学習というと、すぐに難しい本を想像する人がいます。しかしその必要はありません。興味のあるスポーツの記事でも構いません。旅行の記事でも構いません。動物が好きなら動物について読めばよいのです。大切なのは、英語に触れる時間を増やすことです。

実際、英語が上手な生徒たちは読書を勉強だと思っていないことが少なくありません。興味があるから読んでいるだけです。好きな分野について調べているだけです。結果として大量の英語に触れ、それが英語力として蓄積されているのです。

反対に、問題集だけに頼る学習には限界があります。問題集は実力を測ることはできます。しかし実力そのものを作り出してくれるわけではありません。筋力測定だけを何度繰り返しても筋肉は増えないのと同じです。英

語力もまた、実際に英語へ触れることによって成長します。

準1級に合格したいのであれば、英語を読む量を増やしてください。これは遠回りに見えるかもしれませんが。しかし実際には最も確実な近道の1つです。語彙力のためにも、読解力のためにも、英作文のためにも、面接のためにも役立ちます。

私はこれまで数多くの合格者を見てきましたが、「読まないのに合格した人」はほとんど記憶にありません。そのことを象徴する生徒がいました。その生徒は最初、語彙テストの成績は悪くありませんでした。しかし長文になると極端に点数が下がっていました。話を聞くと、英語を読むのは問題集だけだったのです。そこで興味のありそうなニュース記事や短い読み物を紹介し、週に少しずつ読んでもらいました。劇的な変化が起きたわけではありません。しかし半年後には長文への抵抗感が大きく減り、以前より速く読めるようになっていました。そして結果として英検の点数も伸びました。私はこの経験から、読解力の問題を解決する最良の方法は、多くの場合、もっと読むことなのだと改めて確信しました。しかし、「読むようになってから急激に伸びた人」は数え切れないほど見てきました。

英検準1級は知識だけで突破できる試験ではありません。英語という言葉に十分な時間を投資した人が合格する試験です。そして、その投資の中でも最も価値の高いものの1つが読書なのです。

第7節 完璧主義が生み出す失敗

英検準1級を目指す受験者のなかで、私が最も心配するタイプがあります。それは勉強をしない人ではありません。むしろ、その反対です。真面目で責任感が強く、常により良い結果を求め続ける人たちです。一見すると、このような人たちは成功しそうに見えます。実際、学校の成績も良く、周囲からも「頑張り屋さん」と評価されることが多いでしょう。しか

し英語学習の世界では、その真面目さが思わぬ障害になることがあります。なぜなら、完璧主義という考え方は、英語という言葉の性質とあまり相性が良くないからです。

私はこれまで多くの受験者に接してきましたが、英語力が伸びる人と伸びない人の違いを観察していると、興味深いことに気付きます。伸びる人は意外なほど気楽なのです。もちろん勉強はしています。しかし、自分が間違えることを前提として学習しています。知らない単語が出てきても慌てません。長文の内容を100%理解できなくても読み進めます。英作文を書いていて自信のない表現があっても、とりあえず最後まで書き上げます。彼らは不完全な状態で前へ進むことに慣れているのです。一方で、伸び悩む人は完璧な状態になってから行動しようとします。単語を全部覚えてから読もうとする。文法に自信が付いてから書こうとする。もっと発音が良くなってから話そうとする。しかし、その理想的な状態はなかなか訪れません。

そもそも考えてみれば、英語学習には終わりがありません。これは準1級だけの話ではなく、英語そのものの特徴です。英語のネイティブスピーカーでさえ知らない単語がありますし、読んだことのない表現があります。つまり、どこまで行っても学び続ける世界なのです。それにもかかわらず、多くの受験者は「完全に理解してから次へ進まなければならない」と考えてしまいます。しかし、その考え方を続けている限り、学習のスピードは極端に遅くなります。なぜなら、実際には完全に理解する前に次へ進むことが必要だからです。むしろ、進みながら理解を深めていくのが語学学習の自然な姿なのです。

私は英語学習を地図のない街を歩くことによく例えます。知らない街へ行ったとき、すべての道を理解するまで一步も歩かない人はいません。まずは歩き始めます。迷うこともあります。遠回りをすることもあります。そ

れでも少しずつ土地勘が身についていきます。そして気が付けば、以前は複雑に見えていた街を自由に歩けるようになっていきます。英語も同じです。最初からすべてを理解することはできません。だからこそ、多くの失敗や誤解や勘違いを経験しながら成長していくのです。

ところが日本の教育環境では、間違えないことが重視される場面が少なくありません。保護者の方々と話していても、似たような傾向を感じる場合があります。「間違えたら恥ずかしいから、しっかり覚えてから話さない」と無意識に伝えてしまうのです。もちろん悪気はありません。しかし英語学習では、その言葉が挑戦する機会を減らしてしまうことがあります。実際には、間違えながら使うことによってしか身につかない能力もあるのです。

テストでは正解が求められますし、学校ではミスを減らす努力をします。もちろん、それ自体は悪いことではありません。しかし英語学習にその考え方を持ち込み過ぎると問題が起こります。英語とは本来、試しながら覚えるものだからです。間違えた発音を修正する。書いた英文を直してもらう。聞き取れなかった部分を確認する。そのような失敗の繰り返しで成長を生み出します。もし失敗を避けようとするあまり挑戦そのものを避けてしまえば、成長の機会も失われてしまいます。

実際、英検準1級に合格した人たちを振り返ると、失敗をたくさん経験しています。模試で悪い点を取ったこともあります。英作文で厳しい評価を受けたこともあります。面接練習で何も答えられなかったこともあります。しかし、そこで立ち止まらなかったのです。失敗を自分の能力の証明だとは考えませんでした。単なる途中経過だと考えていました。その姿勢こそが最終的な成功につながったのです。

反対に、不合格を繰り返す人の中には、「まだ準備が足りない」という言

葉を何度も口にする人がいます。もちろん場合によっては本当に準備不足なこともあります。しかし、中には十分な力があるにもかかわらず、自信が持てないために挑戦を先延ばしにしている人もいます。語彙が不安だから。リスニングが不安だから。英作文が不安だから。そうして受験を先送りしているうちに、時間だけが過ぎていきます。私はそのような受験者を見るたびに、非常にもったいないと感じます。なぜなら、彼らに足りないのは能力ではなく勇氣だからです。

英検準1級は完璧な人のための試験ではありません。そもそも完璧な受験者など存在しません。どの合格者にも弱点があります。語彙が弱い人もいます。読解が苦手な人もいます。面接に不安を抱えたまま本番を迎える人もいます。それでも合格する人はいます。なぜでしょうか。それは、自分の弱点が消える日を待たないからです。不完全なまま前へ進み、不完全なまま挑戦し、不完全なまま成長していくからです。

もし皆さんが準1級を目指しているのであれば、ぜひ覚えておいていただきたいことがあります。それは、完璧を目指すことと成長することは必ずしも同じではないということです。時には80%の理解で次へ進むことも必要です。時には自信がなくても英作文を書くことが必要です。時には失敗すると分かっているにもかかわらず面接練習を受けることが必要です。そのような小さな挑戦の積み重ねが、最終的には大きな差となります。

英語学習において最も危険なのは失敗ではありません。行動しなくなることです。そして準1級への道のりにおいて、多くの人の足を引っ張る最大の敵は能力不足でも語彙不足でもなく、完璧でなければ前へ進めないという思い込みなのです。

第8節 合格者は何が違うのか

英検準1級に合格した人たちについて話をすると、ときどき不思議な反応

をされることがあります。「やっぱり頭が良い人なんでしょう」「小さい頃から英語をやっていたんでしょう」「海外に住んでいたんでしょう」といったものです。確かに、そのような人がいることは事実です。しかし、私がこれまで見てきた多くの合格者は、必ずしもそのような特別な経歴を持っていたわけではありませんでした。むしろ普通の学生や社会人の方が圧倒的に多かったのです。

私がこの仕事を長く続けていて面白いと思うのは、学習を始めた時点ではそれほど期待されていなかった人が合格し、周囲から優秀だと思われていた人が伸び悩むことがある点です。もちろん全員がそうなるわけではありません。しかし、少なくとも英検準1級に関して言えば、最初の印象だけで結果を予想することは非常に難しいのです。なぜなら、この試験は瞬間的な能力を競う試験ではなく、長期間にわたって積み上げる力を測る試験だからです。

私はこれまで数多くの合格者を見てきましたが、その中で共通している特徴がいくつかあります。そして興味深いことに、それらの特徴は才能とはほとんど関係がありません。例えば、合格者は自分の弱点を非常によく理解しています。語彙が足りないなら語彙を増やします。読解が弱いなら読む量を増やします。リスニングに問題があるなら音声に触れる時間を増やします。当たり前のことのようにですが、実際には多くの人がこれをできません。自分の弱点を認めたくなかったり、もっと楽な方法を探したりするからです。しかし合格者は現実から目を背けません。自分に足りないものを冷静に見つめ、その不足を埋めるために行動します。

また、合格者は目立たない努力を軽視しません。これは私が特に強調したい点です。英語学習の世界では、派手な勉強法や近道ばかりが目立ちはちです。短期間で語彙を増やす方法や、驚くほど簡単にリスニング力を上げる方法などが人気になります。しかし実際の合格者を見ると、その

ような話とは少し違います。私が特によく覚えているのは、ある高校生のケースです。その生徒は教室の中でも飛び抜けて優秀というわけではありませんでした。模試の成績も中位程度でしたし、語彙テストでも満点を取るタイプではありませんでした。しかし毎週必ず課題を提出し、毎週少しずつ改善を積み重ねていました。1か月で見れば大きな違いはありません。しかし1年後には、最も期待されていた生徒たちを追い抜いていました。そのとき改めて感じたのは、英語学習は短距離走ではなくマラソンなのだということでした。

毎日単語を覚える。英文を読む。聞き取れなかった部分を確認する。英作文を書いて添削を受ける。そうした地味な作業を淡々と続けている人が多いのです。

特に印象的なのは、合格者が勉強を特別なイベントにしていないことです。不合格を繰り返している人の中には、「今日は3時間勉強した」「昨日は5時間勉強した」と学習時間を気にする人がいます。もちろん時間は大切です。しかし合格者は少し違います。今日は30分しかできなくてもやります。忙しい日でも単語だけは確認します。少し疲れていても英語の記事を読みます。勉強を日常の一部にしているのです。そのため、学習が長続きます。そして英語学習では、この長続きするということが想像以上に重要なのです。

英検準1級に合格する人は、意外なほど失敗に慣れているという特徴もあります。模試で悪い点数を取ることもあります。過去問で合格点に届かないこともあります。英作文で厳しい評価を受けることもあります。しかし、そのたびに「自分には才能がない」と結論づけることはありません。むしろ、「どこを改善すればよいのだろう」と考えます。失敗を能力の証明ではなく、情報として扱うのです。この考え方の違いは非常に大きいものです。

一方で、不合格になる人の中には、結果によって自信を大きく左右される人がいます。1回良い点数を取ると安心し、1回悪い点数を取ると落ち込んでしまいます。しかし合格者は一喜一憂しません。自分の実力は1回のテストで決まるものではないと理解しているからです。長い目で見て成長していれば、それで良いと考えています。この長期的な視点は、準1級レベルになると特に重要になります。

さらに、合格者は英語を試験科目だけとして考えていません。これは非常に興味深い共通点です。彼らは英語の記事を読みます。動画を見ます。海外の話題に興味を持ちます。英語を使って何かを知ろうとします。つまり、英語そのものに対して好奇心を持っているのです。そのため学習がテスト対策だけになりません。結果として英語との接触時間が増え、それがさらなる成長につながります。

私はこれまでの経験から、英検準1級に合格する人を特別な人たちだとは思っていません。もちろん努力しています。しかし、その努力は普通の人にも十分できる範囲のものです。むしろ違いは考え方にあります。合格者は近道ばかり探しません。完璧を求めすぎません。失敗を恐れません。そして地味な積み重ねを信頼しています。

もし皆さんが「自分は合格者とは違う」と感じているのであれば、安心してください。私が見てきた多くの合格者も、最初から自信満々だったわけではありませんでした。語彙が足りなかった人もいました。長文が苦手だった人もいました。面接を極端に怖がっていた人もいました。しかし、共通していたのは途中で諦めなかったことです。

結局のところ、合格者を特別な存在にしているのは才能ではありません。特別なことをしているから合格したのではなく、当たり前のことを長く続

けたから合格したのです。そして、その事実こそが私たちに希望を与えてくれます。なぜなら才能は選べませんが、習慣は今日から変えることができるからです。

第9節 習慣こそが合否を決める

これまでの章で、私は何度も才能より習慣が重要だという話をしてきました。しかし、この言葉を聞いても実感が湧かない人は少なくないでしょう。世の中には、どう見ても頭の回転が速い人がいます。単語を覚えるのが得意な人もいます。英語を聞けばすぐに理解できる人もいます。そのような人を見ると、「やはり最後は才能なのではないか」と考えてしまうかもしれません。実際、私自身も若い頃はそう思っていました。しかし長年にわたって英語教育の現場に立ち、多くの学習者を見続けてきた結果、私は違う結論にたどり着きました。短期間で見れば才能の差は存在します。しかし数年単位で見れば、最終的な結果を決めるのは習慣であることが圧倒的に多いのです。

考えてみてください。仮に毎日30分英語に触れる人がいるとします。単語を覚え、記事を読み、音声を聞く。その作業を毎日続けます。一方で、週末にまとめて5時間勉強する人がいるとします。どちらも努力しています。しかし1年後、2年後、3年後になると大きな差が生まれることがあります。その理由は学習量だけではありません。毎日英語に触れている人は、英語を生活の一部にしているからです。英語に対する抵抗感が減り、学習を続けることが苦痛ではなくなります。そして、この状態に入った人は非常に強いのです。

私はこれまで何人もの受験者から勉強計画を見せてもらいました。その中には非常に立派な計画もありました。朝は単語学習を30分、夜はリスニングを1時間、週末は長文問題を3セット解く。そのような計画です。し

かし残念ながら、立派な計画が必ず成功につながるわけではありません。なぜなら、計画よりも継続の方が難しいからです。どれほど優れた計画であっても、3週間で終わってしまえば意味がありません。反対に、少し物足りなく見える計画であっても、1年間続ければ大きな成果を生みます。

興味深いことに、英検準1級に合格する人たちは、自分の性格をよく理解しています。無理な計画を立てません。毎日3時間勉強しようとして挫折するくらいなら、毎日30分でも確実に続ける方を選びます。完璧な勉強法を探し続けるよりも、今日やるべきことを終わらせることを優先します。その姿勢は一見すると地味です。しかし成功する人というのは、多くの場合、非常に地味なのです。

私は会社経営においても同じことを感じています。成功している企業は、必ずしも毎日劇的な変化を起こしているわけではありません。日々の業務を改善し、小さな問題を解決し、それを何年も続けています。英語学習もまったく同じです。ある日突然英語ができるようになることはありません。毎日の小さな改善が積み重なり、ある時振り返ると大きな差になっているのです。

また、多くの受験者はモチベーションについて心配します。「やる気が続きません」「最近モチベーションが下がっています」という相談を受けることも少なくありません。しかし正直なところ、私はモチベーションをあまり信用していません。なぜなら、やる気は必ず変化するものだからです。誰でも勉強したくない日があります。疲れている日もあります。気分が乗らない日もあります。そのたびに勉強を休んでいたら、英語力はなかなか向上しません。

合格者たちは、やる気があるから勉強するものではありません。勉強することが習慣になっているから勉強するのです。歯を磨くように、朝食を食べ

るように、自然な行動として英語学習を続けています。もちろん、いつも楽しいわけではありません。しかし、やるかやらないかを毎日判断していないのです。習慣になっているため、とりあえず始めます。そして始めてしまえば意外と続くものです。

もう1つ、私が合格者から学んだことがあります。それは、小さな前進を大切にすることです。反対に、不合格になる人には驚くほど共通した失敗があります。単語帳を買っただけで満足してしまう。過去問の点数ばかり気にする。読書を後回しにする。英作文を試験直前まで書かない。リスニングを聞き流しだけで終わらせる。そのような失敗です。興味深いのは、これらの失敗は特別なものではないということです。多くの受験者が一度は経験します。しかし合格者は途中で気付きます。そして軌道修正します。その小さな修正の積み重ねが、最終的に可否の差になって現れるのです。

多くの人は大きな成果ばかり求めます。模試で急に100点上がらないかと期待します。単語を一気に覚えられないかと考えます。しかし英語学習の現実はもっと地味です。今日は10個単語を覚えた。昨日より1ページ多く読めた。先月は聞き取れなかった音声が少し分かった。そのような小さな変化の積み重ねによって成長していくのです。

私はこれまで数え切れないほどの受験者を見てきましたが、最後に結果を出した人たちには共通点があります。それは特別な能力ではありません。特別な教材でもありません。毎日の行動が安定していたことです。調子の良い日も悪い日も学習を続ける。忙しい日でも英語から完全に離れない。その積み重ねが、やがて大きな成果となって返ってきます。

英検準1級は知識量だけを競う試験ではありません。習慣の試験です。どれだけ長い期間にわたって英語と向き合ってきたか。どれだけ継続して努

力できたか。そうしたものが最終的な結果に現れます。だから私は、受験者に対して「もっと頑張ってください」と言うことはあまりありません。その代わりに、「続けてください」と伝えています。

努力は大切です。しかし、続かない努力には限界があります。

習慣になった努力は強いのです。

そして準1級に合格した人たちを見ていると、結局のところ、最後に勝つのは最も才能のある人ではなく、最も長く続けた人なのだと感じるのです。

第10節 第1章まとめ

ここまで読んでくださった方の中には、少し意外に感じた方もいるかもしれません。

英検準1級についての本なのに、単語帳の選び方や長文読解のテクニックではなく、習慣や考え方についての話が続いたからです。しかし私は、この順番が極めて重要だと考えています。

なぜなら、どれほど優れた教材を使っても、どれほど優れた先生に教わっても、学習に対する考え方が間違っていれば成果は限定的になってしまうからです。

準1級に合格できない受験者を見ていると、多くの場合、原因は能力不足ではありません。努力不足ですらないことも少なくありません。むしろ真面目に勉強している人ほど苦しんでいることがあります。

問題は、努力の方向なのです。

英検準1級を必要以上に恐れてしまう人がいます。準1級は一部の特別な人だけが受かる試験だと思い込み、自分には関係のない世界だと考えてしまうのです。しかし実際には、私が見てきた合格者の多くはごく普通の人たちでした。部活動に忙しい高校生もいましたし、仕事と家庭の責任を抱えながら勉強していた社会人もいました。彼らが特別だったのは才能ではなく、継続することを諦めなかった点です。

また、努力しているのに伸びない受験者も数多く見てきました。しかし詳しく見てみると、勉強していないのではなく、学習の方向がずれていることがほとんどでした。語彙力が不足しているのに長文問題ばかり解いている。大量の教材を買い続ける一方で復習はしていない。英語に触れる時間よりも勉強法を探す時間の方が長い。そのような状態では、どれほど時間をかけても期待した成果は得られません。

さらに、英検2級までの成功体験が準1級では通用しなくなることも学びました。2級までは学校英語の延長線上で対応できる部分がありますが、準1級になると英語との付き合い方そのものを変えなければなりません。単語を暗記するだけでは足りません。英語を読み、聞き、考え、自分の言葉で表現する力が必要になります。その変化を受け入れられる人が前へ進み、従来の方法に固執する人は壁にぶつかります。

私はまた、日本人が幼い頃から身につけてしまう英語学習の習慣についてもお話ししました。英語をテスト科目として考え過ぎること、間違いを恐れ過ぎること、そして英語を英語としてではなく日本語を通して理解しようとすることです。これらは誰かが悪いという話ではありません。多くの人がそのような環境で育ってきたのです。しかし、準1級レベルを目指すのであれば、そうした習慣を少しずつ見直す必要があります。

特にカタカナ英語の問題は象徴的です。私は発音だけが重要だと言いたいわけではありません。しかし英語を英語のまま理解するためには、音を軽視し過ぎることもできません。正しい音を意識することは、リスニング力にも語彙力にも大きく影響します。英語を日本語に変換して理解する段階から、英語を英語として理解する段階へ進むことが必要なのです。

そして、読書についてもお話ししました。私は長年英語教育に関わってきましたが、読まない人が大きく伸びる場面をほとんど見たことがありません。逆に、読む習慣を身につけた人が急激に成長する場面は何度も見てきました。読書は語彙力を育てます。読解力を育てます。英作文を支えます。さらに面接で話す内容の土台まで作ってくれます。地味な方法に見えるかもしれませんが、英語力向上の王道なのです。

また、完璧主義という見えにくい敵についても考えました。英語学習は不完全な状態で進めるしかありません。単語を全部覚えてから長文を読むことはできません。文法を完璧にしてから英作文を書くこともできません。自信が付くまで話さないという選択をしていては、いつまでも話せるようにはなりません。合格者は完璧な人ではありません。不完全なまま前へ進んだ人たちなのです。

そして最後に見てきたように、合格者は決して特別な人ではありませんでした。特別だったのは日々の行動です。派手な勉強法ではなく、地味な積み重ねを信頼していました。毎日単語を覚える。毎日英語を読む。毎日英語を聞く。そのような小さな行動を長い期間にわたって続けていました。

結局のところ、英検準1級は才能の試験ではありません。

もちろん才能の差はあります。しかし、それ以上に大きな影響を持つのが

習慣です。

どのような教材を選ぶかも重要です。

どのような先生に教わるかも重要です。

しかし、それ以上に重要なのは、毎日何をしているかです。

私はこれまで数多くの合格者を見てきました。そして今振り返ると、彼らに共通していたものは1つしかありません。

続けたことです。

単純過ぎて拍子抜けするかもしれません。しかし本当にそうなのです。

英検準1級を目指す旅は、この章で終わりではありません。むしろここが出発点です。

次章からは、いよいよ具体的な学習戦略について考えていきます。まず最初に取り上げるのは、準1級合否の最大の分岐点とも言える語彙力です。

多くの受験者が苦しみ、多くの合格者が重視している分野でもあります。

もし準1級という山を登るのであれば、まず足元を固めなければなりません。

そして、その土台となるのが語彙力なのです。